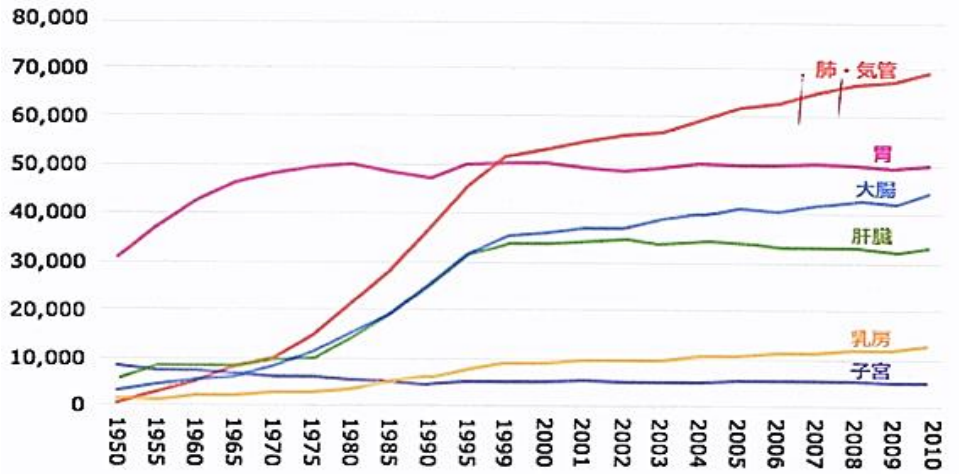
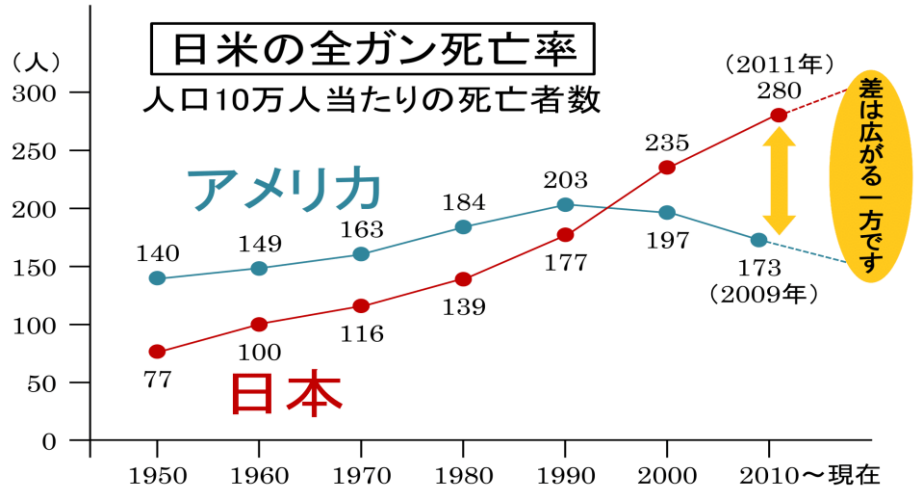
何故、日本は癌死の増大を放置するのか！

この 60 年間の癌死の歴史を見てみれば、異常な増大です。米国は 50 年前に“日本食は理想食だ”と評価していたのです。日本は胃癌しかなく、癌死は米国の半分でした。しかし、厚生省の官僚は”コメの食い過ぎが胃癌を作るとかおかしなことを宣伝して、1970 年には米国食を真似始めた。その為に、乳製品が 100 倍に増加して、パンが 25 倍、牛肉などが 25 倍に増加して、当然のごとく、米国タイプの癌、肺癌、大腸癌、前立腺がん、乳癌、膵臓がん、肝臓癌などが増加して、-挙に癌死が 4 倍に増加して、米国の 2 倍強も癌死する時代に変貌したのです。米国のコーネル大学のキャンベル教授は”癌の増加は乳製品とパンのグルテンが主要な原因だと述べています。最後の肝臓がんはシナのタイプです。それにもかかわらず、厚生省は超高齢化で癌死が増加しているという非科学的説明をして、責任逃れをしているのです。



ところが、厚生省がこのデータを見ても、何故、超高齢化のために癌死が増加していると主張し続けるのかと言うのならば、何故、米国の癌死が減少していることに対して、何が言えるのでしょうか！



※厚生労働省「人口動態統計」、アメリカ総務省「Statistical Abstract of United States」より

米国では高齢化が進んでいないというのでしょうか！　米国の癌死は減少しているのです。

米国は“癌の第 2 次予防”（癌が出てくるのを待ち、癌検診をして、3 大療法に持ち込むいうやり方）をやめて、“癌の第 1 次予防”（癌が出ないように癌の第 1 次予防をしようというやり方）に変更しようとしているし、上流階級やハリーウッドは日本食を真似るべきだという食の概念を変えようとしているのです。

日本は実績の出ない癌の第 2 次予防を夢遊病のごとく続けているのです。それだけでなく、国民が癌検診の受信率が少なく、それで癌死が減少しないのだという国民を非難することを間接的に述べるだけなのです。

今や日本人の出生数は 90 万人、癌死は 40 万人ですから、人口減少の直接的原因をなしているのです。この現実に対して、国会議員も厚生省も癌センターも何も言いません。

日本食を減少させて、米国食を真似すぎた国民の問題もあるでしょうが、裏に隠された最大の問題は厚生省が、

“日本人の癌死減少のための血清診断技術を悉くつぶしてきた歴史が背景にあるのです。
胃癌が多かった時代に、東大の三木先生が開発した、ペプシノーゲン検査を 200 百人の医師達が保険に認めるように申請しました（１９７１）が、無視をしました。この検査は胃透視や内視鏡の検査より精度が高い検査ですから、これに、胃癌の第１次予防法に変更していれば、胃癌死は激減していたでしょう。
次に、増加した肺癌に対して、厚生省自身は“胸のレントゲンは肺癌には 4%の効果しかない”という発表をしている時に、“ＣＥＡとフェリチンの組み合わせで 80%近くの肺癌をチェックできる”という発表を札幌医大の漆ザク教授達がしましたが、これも無視をしまして、日本はＣＴ検査の方に傾いていきました。その為に肺癌の減少の為のチャンスを失いました。
次には私が開発した腫瘍マーカー総合検診（ＴＭＣＡ）検査の件が、1983 年と、1993 年に国会の予算委員会で質問された時にも、厚生省はこれも無視をしました。ＴＭＣＡ検査に関しては米国の一流誌、キャンサーに（1994 年）論文が出たのですから無視をすべきではないのです。これが取り上げられておれば、日本の癌死の減少は確実に生じていたでしょう。
私の知り合いの元厚生省幹部は“厚生省が国民の健康のことを考えることはなく、ハローワークしかしません”というのです。厚生省の腐敗ぶりがうかがえます。
皆様は本当だろうかと考えますでしょうが、現に、日本国の財務省が国の発展を 27 年間も妨げて、デフレを続けることと同じ現象でしょう。官僚は腐敗した江戸家老にしか過ぎないのです。